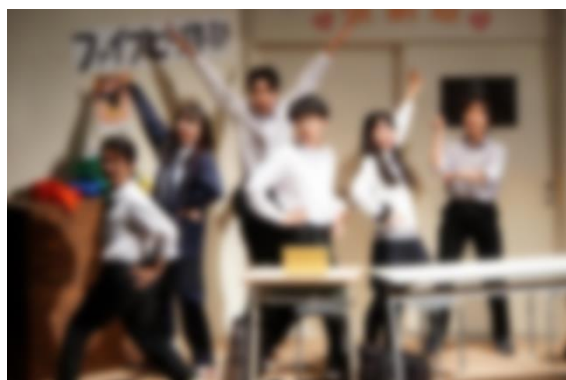


第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号1番 市立札幌藻岩高等学校（石狩支部）

「話聞くよおじさん！」 作：米永道裕

この作品は虐めが原因で自分の殻に閉じこもり、二次元に依存してしまった麗と、それを助けようとする陸を筆頭としたファイブビーズ、そして熱血漢の先生が織り成す心温まるハチャメチャコメディだ。緞帳が上がった瞬間、私たちは大きな衝撃を受けた。なぜならとても巨大な舞台装置が複数鎮座していたからである。だがそれだけに留まらない。装置を動かして一時的に作られた舞台中央の空間をスマホの画面とみなして話聞くよおじさんやアイドルの配信描写をしたり、演劇部室と麗の部屋という別の空間を表現したりと多くの役割を担わせていたおかげで、その世界観にすんなり入り込むことができた。劇全体を通して自然な感情の流れによって、つい笑ってしまうような工夫が多く施されていた。何時如何なる時もボケとツッコミを繰り返し、話聞くよおじさんを強調さ



せるために大きな頭を目立つ位置に上げたり、急に壁を突き破り登場したり、舞台演出のBGMなどに対してもツッコミを入れるなど挙げればキリがない程の発想が、常に私達の予想の斜め上を行っていた。

演技においては、キャラクター性や関係性がしっかりと伝わって来るような会話や動きが多く、各々の存在が際立っていた。特に麗は陸たちを拒絶しながらも、思い出の品であるタコピーのクッションを大事

そうに抱き締めたりと相反する行動を取っていたことから、過去の思い出を心の支えにしていたのではないかという意見もあった。

物語が進む中で、私たちは特に麗や陸の成長や変化を強く感じた。それはただ単に困難を乗り越え一皮むけたという意味ではなく、先生の台詞にもある「殻を内側から破らないと」との言葉通りに、麗はおじさんとの会話履歴を復元しなくていいと言い、自ら閉ざしていた世界から一步を踏み出したこと。陸はどうすれば麗がまた学校に来られるようになるのか、言葉の力とは何か、本当に麗が望んでいるものは何か、などを悩

んだ末に出した諦めないという強い意志を示したこと。これらのことにより心を強く揺さぶられたのだと思った。上辺だけ取り繕ったAIや二次元アプリの「話聞くよ」と、麗から無理矢理にでも相談を聞こうとした陸の「話聞くよ」には言葉の重みの差があり、人の言葉にしか宿らない確かな温もりがあるのではないかと感じた。最後の場面では麗のその後について語られなかったことも、観客の想像に任せる配慮として受け取ることが出来た。最後までコメディ要素も取り入れつつ、心情表現が繊細であり、私たちの感情を強く揺さぶり涙を誘う質の高い作品であった。

